



(絵：野口宣友)

### 南部町の民話3

## 酒飲み 河童



福成にある福田神社の相見宮司  
家に伝わる話…。

江戸時代の初め頃のある夜、屋敷の蔵から酒が三升ばかり盗まれていた。次の日も、その次の日も酒が三升ずつなくなり、庭の砂の上に水かきのついた足跡が残り、堀の方へと続いていた。宮司さんは、「これは河童の仕業に違いない。」と直感し、なんとか生け捕りにしようと考えた。ところが、河童は身体がヌルヌルし、投網でも捕らえることが出来ないと聞いている。それに、人間の腕力の5倍も力があるという。いかにして生け捕りにすべきか何日も考えた。その間も夜になると、河童は屋敷のまわりを鼻唄を歌いながら歩き回っていた。

宮司さんは、子どもの頃に聞いた「河童はきゅうりと酒が大好物だが、酒が頭の上の皿に入るとたちまち倒れてしまう」という話を

思い出した。

早速、家来衆を集めて、蔵の扉を開けると天井から酒の滴が零れ落ちるように仕掛けを作らせた。村人が寝静まった深夜、河童が現れいつものように蔵の扉を開けようとした。その日に限って思うように扉が開かず、つい力を入れすぎたところ、天井から酒の滴が「ポツリ、ポツリ」と頭の皿の中に落ちた。

河童はそれに気付かず、いつものように酒を飲み始めた。ところが普段と違いあつという間に酔いが回り大きないびきをたてて寝込んでしまった。

宮司さんは「しめた」とばかりに、縄で河童を縛り上げ、塩をまぶした荒縄で松の大木にくくりつけた。

翌日、太陽が昇るとようやく河童も目を覚まし、「ギャーギャー」と大声を上げた。

太陽が高く上っていくと塩をまぶした荒縄が河童の身体に食い込んで、暑さで身体の水分もなくなり干からび始めてきた。

二、三日過ぎた頃から「許してください。許してください。」と宮司さんに訴えるようになった。七日目の夜になると「今夜は七日目で、私の命もこれでおしまいです。もう悪いことをしませんので許してください。」と弱々しい声で訴えた。宮司さんは神職の立場にあるりっぱな人間である。相手が何者であれ悪いことを認めたらそれ以上はとがめることはないと考えた。「二度と悪いことはないな。それなら明日からは夜ごと村を夜回りせよ。そのかわり屋敷の前にお祈りの好きな酒を置いておく。給金代わりじゃ。」すっかり心を入れ替えた河童は次の夜から村を巡回して警備に尽くしたということじゃ。